虫ぼし抄

関西大学図書館　図書館学習支援講座「書評のススメ!」の実施について

北　野　正　人

2018年度秋学期、関西大学図書館では、丸善雄松堂株式会社、株式会社編集工学研究所、株式会社丸善ジュンク堂書店と協働し、以下のとおり「書評のススメ！」という学習支援講座を実施した。

1. 趣旨

学生にとって身近なアプリなどを用い、読書に関する8つのMISSIONをクリアすることで、リコメンド（要約・紹介文）とキャッチコピーを作成し「読む力」、「書く力」を養成する。最終的にはメールラウンジを用い、書評を完成させていくことで、読み手にその本を読みたい気持ちにさせる「伝える力」を身につけることが目標となる。

2. 受講生数

18名

最終目標である書評の提出者は17名

3. 講座概要

⑴ 実施場所

総合図書館1階ラーニングコモンズ内ワークショップエリア

⑵ 講師

大木　とも子　氏（丸善雄松堂株式会社／イシス編集学校　師範代）ほか

⑶ スケジュール、内容

【第1回】10月24日(水) 4限　14：40～16：10

「読むこと」と「書くこと」が、「情報を編集する力」によってつながっていることをふまえ、スマートフォンで、読書トレーニングアプリ［メクリ］を実際に用い「新入生に贈る100冊」の中から自分が読んでみたいと思う1冊の本を、まず選定する。

［メクリ］は、［MISSION］（質問）に回答することで、ナビゲーターから［指南］（アドバイスやヒント）が返ってくる仕組みとなっており、本講座中に、「目次を読む」、「キーワードを集める」、「キーワードを探して本の中を探索する」といった5つの［MISSION］をクリアする。

＜第1回の課題＞

第2回までに、6つ目の［MISSION］（本文を読む）を終了する。

【第2回】10月31日(水) 4限　14：40～16：10

これまでクリアしてきた［MISSION］への回答をふまえ、本の「キャッチコピー」と「リコメンド文」（200字程度：本の紹介・要約）を作成する。

さらに、書評（800字～1,000字）の作成にあたりパソコンを使ってアクセスするラウンジという教室型サイト［Edit Cafe］の利用ガイダンスを行う。

＜第2回の課題①＞　期限：11月7日(水)

第2回で作成したキャッチコピーとリコメンド文に対し、講師からアドバイスを行い、内容の見直しを行う。

＜第2回の課題②＞　期限：11月14日(水)

［Edit Cafe］を通じ、講師の指南（アドバイス・ヒント）を参考にしながら書評を完成させる。

【第3回（講評会）】

11月28日(水) 4限　14：40～16：10

学内外から識者を招き選考を行った「書評のススメ！」大賞の表彰式および講評会、あわせて本の「キャッチコピー」と「リコメンド文」を本の帯とし、インターネットを通じて学内外で投票を行った「KANDAI　OBI-1グランプリ」の結果発表を行う。

なお、書評の選考者、講評者は次の5名である。

- 野村　育弘　氏（株式会社編集工学研究所　代表取締役社長）
- 中村　育広　氏（MARUZEN＆ジュンク堂書店梅田店店長）
- 大木　とも子　氏（丸善雄松堂株式会社／ISIS編集学校師範代）
- 深井　麗雄　氏（関西大学総合企画室　広報課

広報アドバイザー／元毎日新聞編集局長）

- 寺島　紀衣　氏（関西大学ライティングラボ　アカデミック・アドバイザー）

⑷　関連企画

①KANDAI　OBI-1グランプリ
〔2018年11月13日(火)～21日(水)〕
講座の実施期間中に、学内外を問わず受講生が作成した本の帯（キャッチコピーとリコメンド文）の投票をWEBアンケートで実施する。

②総合図書館での展示
〔2019年1月16日(水)～2月15日(金)〕
帯を付けた本を総合図書館にて書評とあわせて展示を行う。

③MARUZEN＆ジュンク堂書店での陳列、販売
〔2019年1月16日(水)～2月15日(金)〕
「書評のススメ！」コーナーを1階に設け、帯を付けた形で本を陳列、販売、あわせて書評も紹介する。コーナーの設置については、書店員の指導の下、実際の店舗での展示コーナーづくりも体験する。

④2019年度　新入生に贈る100冊への書評掲載
〔2019年4月1日(月)〕
入学式で配布される冊子「新入生に贈る100冊（2019年度版)」に「書評のススメ！」各賞受賞者3名の書評を掲載する。

⑤図書館フォーラムへの書評掲載
〔2019年10月31日(木）発行〕
受講生全員の書評を関西大学図書館発行の紀要「図書館フォーラム第24号」に掲載する。

4.　担当者所見

⑴　実施の経緯

本取組は、現代の教育界に課せられた課題といえる「思考力」、「判断力」、「表現力」を学生が身につけるため、関西大学図書館の豊富な資源を有効活用できないかと考えたことに端を発する。一方、本学の芝井敬司学長が、学部入学式における式辞において、読書の啓発に触れていただいていることもふまえ、その流れを加速させるような取組ができないかとの思いがあった。

他大学の状況などを調査する中で、単に思ったことを書き連ねる「読書感想文」ではなく、他者に伝えることが前提となる「書評」の存在に行きあたった。1冊の本にどっぷりと浸り、その思いを書評にしたためる中で、学生は「読む」、「書く」力だけでなく「考える」、「伝える」力が身につくのではないかと考えた。

先に述べた通り、芝井学長の意向の下、本学では「新入生に贈る100冊の本」という取組を2018年度より行っており、これらを活用した形で書評講座の素案を作成した。素案については割愛するが、書評を作成するという本旨を除いて、今回行った「書評のススメ！」のスキームとは、まったくの別物である。これはこれで面白い取組であるとの自負があるので、機が熟したら具現化を試みたい。

⑵　協働体制

本取組が実施できたのは、日頃よりやりとりがある丸善雄松堂のご尽力による賜物である。図書館とは紀伊國屋書店と三者協働で電子ブックのTrial Reading「enjoy ebook everyday ── いつでもどこでも電子ブック ──」を行っていたご縁から、実施について相談させていただいた。グループ会社であり、他大学の図書館において魅力的かつ意欲的な取組みを行い、様々な知見とノウハウをもつ編集工学研究所に参画いただいたことが、本取組の方向性を決定づけた。

書評を作成するプロセスの中で立派な「本の帯」

を仕立てることに加え、インターネットを通じ、広く学内外に投票を呼びかけられたこと、ましてやMARUZEN＆ジュンク堂書店梅田店という実書店を巻き込んで書評を展示するとともに、その帯を巻いて販売するといった「挑戦」を行えたこと（売り上げにも相応の貢献ができたと聞き及んでいる）はひとえに編集工学研究所のご協力なくしてはありえなかった。学内外から少なからず反響があり、大学図書館の可能性、本学学生の能力を内外に示せたことは、協業の賜物であることはいうまでもない。

また、翌年度の「新入生に贈る100冊の本」に掲載いただく関係から広報課、学生が書評の精度を高めるよう指導、助言をいただくため教育推進部とも連携をはかった。

⑶　学生

本取組の主役はいうまでもなく「学生」である。募集段階では、学生に身近なアプリを用いることや関連企画を切り口に訴求をはかった反面、講座の性質から「途中辞退できない」、「講座の参加には課題をクリアする必要がある」、「好きな1冊を読めるとは限らない」など相応のハードルを事前提示した。

学生が負担に感じ、果たして応募があるのか危惧していたが、結果的には、定員（10名）を倍近く上回る応募があった。応募者の受講動機は、「本や読書が好き」、「文章力や伝える力を身につけたい」、「書評を書いてみたい」という想定の範囲から「卒業にあたり何か形を残したい」といった思い出づくりまで、多彩であったが、結果的に1名を除き、講座を修了することができた。彼らの成果である書評については、是非、本フォーラムでご確認いただきたい。

5. 成果

本取組では、当初想定していなかったものも含めいくつかの成果があったと考えている。

⑴　タテのつながり

本取組は、講座形式としているが、反転学習の要素も含めており、受講生は、リコメンド文や書評を講座外の時間に作成せざるをえず、期日を厳守し、提出を重ね、ブラッシュアップすることで完成につなげた。その添削や指導を行うのは、編集工学研究所が提供する編集術のノウハウを培った大木氏をはじめとする師範代と呼ばれる方々であり、受講生個々と何度もやりとりを重ね、対応は深夜に及ぶこともあった。学生の熱意に引っ張られたとおっしゃってはいるが、師範代の方々の姿勢には、取組をコーディネートする立場として頭が下がる思いであった。

経費の都合上、講評会にすべての師範代の方に参加いただけなかったが、受講生との間には、少なからず師弟関係が構築されていた。

⑵　ヨコのつながり

贔屓目も入っているが、受講生は、それぞれの目的意識の下、一冊の本に正面から向き合い、アウトプットを完成させた。

図書館ならではの学習支援を模索する中、講座期間中やMARUZEN＆ジュンク堂書店梅田店での陳列など受講生と接する機会を通じ、潜在的利用者を含めた利用促進だけでなく、図書館や本に愛着をもつコアな学生へのアプローチが不可欠と感じた。

なお、受講生は、講座終了後も有志で読書会を開くなど自発的な活動を行っており、図書館としてサポートを行っていきたい。

⑶　費用対効果

本取組の難点は、相当のマンパワーを伴う手厚い内容であるものの、その労力から20名弱の受講生にしか対応できないことがいえる。しかし、学生が習得したスキルや貴重な経験はもとより、受講生の成果を拠り所に学内外に広く発信したことで、図書館ができる大学への貢献のあり方を示せたのではと考えている。

ひとえに丸善雄松堂、編集工学研究所、丸善ジュンク堂書店との協業あってのものであるが、学内で取組を完結させるより、多くの副次的な効果が見出せたことは事実である。

6. おわりに

図書館や店頭で書評や本の帯を見た学生、高校生、保護者、卒業生、ひいては一般の方々に関大生や総合図書館の「現在」が伝わればとの思いで取り組んだ。「読書離れ」という共通の敵に対して図書館という狭い範疇に収まることなく、認識を共有できるものとスクラムを組み、対峙していく必要性を痛感している。

膨大な資源を有する図書館の可能性は計り知れない。今後も学生ファーストを念頭に置き、大学や社会を取り巻く課題解決に少しでもつながるような取組を能動的に行っていきたい。

（きたの　まさと　図書館事務室）